



【タイトル】

山紫水明の恋、春

【著者名】

熊谷祐紀

【あらすじ】

江戸時代。京都のおてんばな町娘・小春は、見習い絵師・春信に一目惚れ。恋敵である舞妓・梅葉、遊女・お優と恋の争奪戦を繰り広げる。恋心暴走して願掛けで清水寺の舞台から飛び降りてしまふ小春。果たして……？ 浮世絵『清水の舞台より飛び美人』をモチーフに描く、ポップな時代劇恋愛コメディ！

【特記事項】

少女の等身大な恋を浮世絵に落とし込み、ビジュアル的にも楽しめるエンタメ作品にしたい。古今東西の不変的テーマである恋愛を、京都を舞台にポップなコメディで描くことで、海外の反響も期待できるのではないか。また、本作を「春の恋」として、京都の春夏秋冬をテーマにした4つの恋物語を時代を交差して描く長編映画『山紫水明の恋』にしたいと密かに目論んでいる。

【本編の文字数】

5065文字

○1 清水寺・清水の舞台 ※現代

舞台から下を覗く修学旅行の高校生男子と男性タクシ―運転手。

男子1 「うおー、怖ー」

男子2 「落ちたら死ぬ」

運転手 「でも江戸時代にはね、ここから200人以上が飛び降りたんだよ」

男子1 「えっ、なんで？」

運転手 「願掛け。ここから飛び降りて生きていけば願いが叶うって流行ってね」

男子1 「えーっ、無理無理！」

男子2 「マジか！」

男子1 「風間いけよ。水原さんと付き合いたって」

男子3 (風間) 「無理だよ！」

○2 青空 ※江戸時代

T・寛保3年(1743年)

バタバタと宙を舞う(落下している)男。

男 「うわああああ……！」

バキバキッ、ゴキッ!

爽やかな青空に落下した音が響く。

○3 茶屋

小春 「えっ！ 辰さんが死んだ!？」

目を丸くして驚く町娘・小春(15)。

常連客の親父たちに囲まれて働いている。

常連客1 「ああ、清水寺の舞台から落ちて頭を打ったんや」

小春 「えええー！ なんでそんな所から落ちたんや!？」

常連客1 「なんでって、願掛けや」

小春 「願掛け?」

常連客2 「清水の観音さまに命を預けてな、願いを祈って飛び降

りるんや。ご加護があれば、命も助かり願ひも叶うとい
う話や」

常連客3「知らねえのか？ いま流行ってるんやで」

小春「ひゃー。うちは無理やわ。高いところ苦手やもん。祈る
だけじゃあかん？」

常連客1「あかんあかん。命を捨てる覚悟を見せんと願ひは叶わ
ん」

小春「えー」

などと盛り上がる小町と親父たち。

小春、ふいにカメラ目線になって自己紹介。

小春「うちは高木小春15歳。京都三条にある腰掛茶屋の看板
娘。自分で言うのもなんやけど、明るくて元気で可愛く
て人気者や」

常連客1「よし、わしも、小春ちゃんと夫婦になりたいって飛
び降りようかな？」

小春「そのまま死んでしまえばいい。うちは、尾上菊五郎みた
いな、華やかでかっこいい人のお嫁になりたいんや。い
きで上品で色白で色気があつて……」

くすくすと馬鹿にしたような笑い声が聞こえる。

小春「振り向いて、ムスッ」

奥の席で、可愛らしい舞妓・梅葉（一）と、年増の
遊女・お優（30）が笑っている。

梅葉「くすくす」

お優「なにを阿呆な夢見てるんや」

小春「……うるさい。半人前の舞妓に年増の遊女」

梅葉「失礼やわー」

お優「ふん。あんたに歌舞伎役者との出会いはないわ。こんな
しけた茶屋にいい男が来るか」

厨房から店主の親父が包丁持ったまま出てくる。

店主「（聞こえて）しけた茶屋で悪かったなあ」

と、浮世絵師・西川祐信（二）がやって来る。

祐信「なにをした面しとるんや？」

店主「あ、西川先生。いらっしやい」

祐信「ああ、いつものやつをな、ふたり分頼むわ」

小春「ふたり分？」

祐信の背後から、イケメン青年・鈴木春信（18）が華やかな空気を纏って登場する。

小春「……！」

祐信「今度うちに入門した駆け出しの絵師や。わざわざ江戸から来たんや。よろしくたのむで」

小春「……」

梅葉「……」

お優「……」

春信に一目惚れしてぼろろとする3人。

春信「鈴木春信です。先生のような一流の浮世絵師目指してます」

祐信「ははは、口がうまいんや。いい男な上に、絵の才能があつて将来有望や。お嫁さんも募集中やで」

小春「！」

梅葉「！」

お優「！」

スイッチが入る3人！

春信「いや、今は絵に集中したいので……」

我先に挨拶しようと揉み合う3人。

舞い上がって2人を押し退けて先走ってしまう小春。

小春「う、うちを……！」

春信「（きよとん）……？」

小春「あ……」

我にかえって恥ずかしくなる小町。

小春「え、え、え、絵の題材に描いてもええですよ」

春信「あ……いや、結構です」

ポカンと小春の頭を叩くお優。

お優「いきなり、困つとるやないか」

○4 鴨川（夕）

土手に座ってぼろろとしている小春。

小春「（ぶつぶつ）こんな気持ちはじめてや。あんな一瞬で人を

好きになるもんなんやな……」

ひとりで顔を赤くして照れる小春。

小春「……初恋や。どうしたらええんやろ」

○5 恋に奮闘する小町の点描（日替わり）

縁結びの神社でお参りする小春。

小春「初々しく……」

× × ×

茶屋。春信がわずかに残したお茶をこっそりズズズと飲む小春。

店主「（見ていた）何をしとるんや」

小春「（恥ずかしい）いややあっ！」

× × ×

西川祐信の工房。春信に店の団子を勝手に只で差し入れする小春。

店主「（唐突に現れて）勝手に団子を只であげるなー！」

× × ×

工房から帰る春信をストーカーする小春。

店主「（唐突に現れて）勝手に店をさぼるなー！」

× × ×

怪しい葉売りから惚れ薬（イモリの黒焼き）を買って、春信のお茶に入れる小春。

店主「（見ていた）勝手にお茶に変なもの入れるなー！」

店主に怒られている小町を呆れ顔で見ている常連客たち。

常連客1「あゝあ、空回りしとるわ」

常連客2「恋したことなかったんかいな」

常連客3「それに比べて……」

振り向く常連客たち。

梅葉が春信とお茶を飲んでいる。

楽しそうに話しながらいい感じの2人。

常連客1「さすが人気の舞妓やな。可愛いし、しおらしいし、でもって話し上手やし」

常連客2 「春信もまんざらでもなさそうやな」

常連客3 「こりやあ、小春ちゃん完全に負けとるわ」

と、お優が割り込んできて大人の色気とエロさで春信にアタックする。

梅葉「ちよつと〜」

お優「こんな小娘なんかよりうちの方がええよ。大人の女の味を教えてあげる」

春信「(照れてタジタジ) ……」

春信にボディタッチしてガンガン攻めるお優。

まんざらでも無さそうな春信。

常連客1 「あゝあ、鼻の下伸ばしてデレデレして」

常連客2 「ありやあ、男はたまらんよなあ」

常連客3 「こりやあ、完全にお優が優勢やなあ」

と、小春も割り込む。

小春「この色婆あめ！」

お優「なんやて!?!」

梅葉「(ため息) はあ〜」

掴み合いのケンカになる小春とお優。

暴走する小春をキョトンと見つめる春信。

春信「……」

お優「大切な常連客に向かってなんや、小娘！」

小春「こんなしけた茶屋で何が常連客や、阿呆！」

店主「(引き離して) 阿呆はお前や！」

○6 縁結びの神社

意気消沈して参道を歩く小春と梅葉。

梅葉「ケンカはやめなさいよ」

小春「だって、このままじゃ、あの年増に春信さんをとられてしまう」

梅葉「そうやけど……」

小春「ふたりに力を合わせて頑張ろう」

梅葉「ふたりに頑張っただうなのよ？」

いたたまれない様子で参拝する2人。

小春「これ、毎日やってるんやけどご利益がないんや……」

○7 西川祐信の工房（日替わり）

絵の修行に励む春信。

隣の部屋で祐信と来客の男が話している。

祐信「春信を見て）そんなわけで、あいつは3人の女に毎日言い寄られてるんや」

来客の男「（春信を見て）羨ましいな。誰を選ぶんや？」

祐信「お優の美貌と色香はたまらんし、可愛いけど控えめな小梅もいじらしい」

来客の男「わしはあの茶屋の娘が好きやけどなあ。明るくて元気で……」

祐信「いや、小春は黙ってたら可愛いけど、珍獣やな」

来客の男「はっはっは。珍獣か」

春信「（聞こえている）……」

祐信「今はお優が優勢やな。まあ遊女やさかい、嫁にするかどうかは別として。（春信に）なあ、春信！」

春信「振り向いて）……だから、私は今は絵に集中したいのでそれどころではないです」

祐信「なにを言うとするんや。色恋を知らずにいい絵が描けるか
ら」

春信「……」

○8 遊郭・座敷（夜）

お優とガマガエルのような中年男が向かい合って座っている。

中年男「（ニヤニヤ）……」

お優「（涙ぐんで）……」

○9 茶屋の裏（日替わり）

お優から事情を聞いて驚く小春。

小春「うそやろ……」

お優「ほんまや。いつの間にか決まってるん。あのガマガエルに身請けされて妾になるんや」

小春「なんでそんな急に」

お優「青天の霹靂や。まるで誰かの策略にはめられた感じや」

小春「あのガマガエルと。この世の終わりやんか……」

お優「……そこまで言うなや。まあ、そう言うことで、うちは春信さんをめぐる恋の戦いから脱落や……（顔を伏せ肩を震わせる）」

小春「そんな……あんたらしくもない……」

お優「（泣いている？）……」

と、顔を上げバサつとした表情になるお優。

お優「でも、吹っ切った。やっぱり男は金や。顔よりも金や。

例え見た目はガマガエルでも、あいつは京都きつての豪商や！」

小春「えええ〜！」

お優「（しみじみ）貧しい農家に生まれて、7人兄弟の長女として家を支えて、その上、借金を背負った家族を養うために遊郭の遊女になったんや。こんな生活から、早く抜け出したいと思ってた。これはひよつとしたら、神様の思し召しかもしれん！」

小春「ええ〜……」

お優「これから、うちの本当の人生が始まるんや」

小春「（啞然）……」

お優「だから、まあがんばりや。憎まれ口叩いとったけど、あんた見てたらなんや楽しくて、妹みたいでなあ」

小春「……うん」

物陰から2人の様子を見ていた梅葉。

梅葉「……」

○10 とある寺の境内（日替わり）

密会している春信と梅葉。

春信「え、お優さんが？」

梅葉「そう。だから、春信さんはもうお優さんとは……」

春信「いや、私は別に」

梅葉「だから、思い切って言うけど……（もじもじ）うちと一緒にならへん？」

春信「う、それは……」

梅葉「なんで？ うちのこと嫌い？」

春信「いやいや、そんなわけないけど」

梅葉「じゃあなんで……。あ、まさか、まさかうちより小春のことが！」

春信「いや、そういうわけでは……。ただ、小春ちゃんは陽気な春の野うさぎみたいで楽しいっていうか。この前なんか……」

と、小春のエピソードを思わず楽しそうに話す春信に、顔を歪める梅葉。

梅葉「梅葉の表情に気づいて」あ……！！」

梅葉「（意地らしくシクシク泣く）」

春信「あ、いや、困ったな……」

○11 雑木林（夜）

豹変して般若の形相で怒り狂う梅葉。

梅葉「小春なんて珍獣やないかー！」

頭に蠟燭を立てて藁人形に五寸釘を打ちつけて丑の刻参りをして叫んでいる。

梅葉「せっかく苦勞して、ガマガエルを焚きつけてお優を陥れたのに、まさか、まさか、まさか小春なんかに出し抜かれるなんてー！」

実は腹黒で性格悪かった悪役っぷりを見せる。

梅葉「たかが町娘のくせに生意気な。小春なんかいーひんようになってもうたらええんや！」

少し落ち着き、しばし考える。

梅葉「（思いついて）そうや、小春なんか、清水の舞台から飛び降りて死んでもうたらええんや」

○12 縁結びの神社（日替わり）

梅葉が泣いて（嘘泣き）小春と話している。

梅葉「春信さん、うちとは付き合う気ないって……」

小春「え……」

梅葉「ひよっとしたら、小春のことを……」

小春「え……」

梅葉「願掛けたら？」

小春「願掛け？」

梅葉「芸妓の姉さんがな、願掛けで清水の舞台から飛び降りてな、好きな人と一緒になったんや」

小春「え！」

梅葉「なんでもな、裏技を使っただって。（ヒソヒソ）傘をさして飛び降りたんやって。ふうわりとな、怪我なく飛び降りたんやって」

小春「傘！？」

梅葉「（もじもじ）春信さんと一緒になれるんやったら思い切っ
て飛びたいって思ったけど、うちは怖くて無理やった。
いくら傘さしても、そないな勇氣あらへんさかいなあ」

逡巡し、決意する小春。

小春「……うちは……やる！」

駆け出す小春。

○13 とある道

思い通りに事が運んでスキップして歩く梅葉。

梅葉「あはははは、阿呆な小春。傘さしたぐらいで助かるもんか。頭打って死んでしまえ！」

と、通りがかった春信が見ていた。

春信「なんのことだ？」

梅葉「あっ！」

春信「頭打って死ぬってどう言うことだ！ 小春ちゃんに何を言ったんだ！」

○14 清水寺への道

小春を止めに清水寺に走る春信。

○15 清水寺

小春が傘を持って清水の舞台に立っている。
小春「(決意)……」

助走で走り出す小春。

舞台下に駆けつける春信。

フワッ、飛び立つ小春。

上空に小春を見つける春信。

春信「あっ！」

傘をさして飛んでいる小春。

春信にはスローモーションで見える。

空飛ぶ小春に心を奪われる春信。

春信「……」

バキバキッと桜の木に落下する小春。

桜の花びらが舞い散る。

○16 桜並木道

桜の花びらが舞う中、泣いている小春をおんぶして
歩く春信。

春信「足が折れただけで済んでよかったけど」

小春「(泣)痛いよ〜」

春信「まったく無茶なことを。死んだらどうするんですか？」

小春「……だって」

春信「……小春に、何かあったら私が困ります」

小春「(ぐすっ) え？」

春信「(照)……小春の絵が、描けなくなる」

小春「！」

キュッと春信に抱きつく小春。



浮世絵『清水の舞台より飛ぶ美人』を鑑賞している
修学旅行の高校生女子と女性学芸員。

学芸員「……なんて物語があったりしてね。本物はボストン美術館にあるんだけど、これが有名な『清水の舞台より飛ぶ美人』です。江戸時代の浮世絵師・鈴木春信が1765年に発表した作品。恋の成就をかけた女心を、花びらのごとく舞い降りる姿として描いたって言われてるの」

女子1「はぁ、命短し恋せよ乙女、だね」

女子2「水原、あんた今すぐ清水寺行って飛び降りてきなよ。風間君と付き合いたって」

女子3（水原）「無理だよ！」

〈了〉

【備考】

- ・小春と水原さん、春信と風間君は一人二役の想定。
- ・京都弁は現状仮です。